

# 言語への旅立ち

## 言語学研究会

言語は人間の全体へと至る通路である。——まず言語は人間の内面へと至る通路であろう。日常的にも、未知の人の人柄を知り、独自の内面生活に触れたり、最も親密な人々がお互いの気持ちを確かめあうのは、何よりもこの言語による。これまでほど多くの人々が言葉によって他の人の“真心”を信じ、あるいは欺かれたことだろう。そして、どれほど多くの人間をついての探究者が言語と人間の深奥への手がかりを見出したことだろう。学問的にも、人間の精神の根柢を探る最大の手がかりは言語である。およそ言語が言語であるために満たされねばならない言語の形式の探究はそれ自身、人間の〈普遍的特徴〉の探究である。あるいは、子供が言語を習得し、逆にある不幸な人々が突然言語を喪失するありさまは、言語と精神との深い依存の端的な例である。そして最後に、人間が自分自身の気持ちを本当に知るのを言語によることである。言葉を探めて満たされねばならない志向は、うつろいやすい曖昧なものどしかなく、その人自身のこころのなかにすらとめおかれることはないものだ。ポール・ヴァレリーは近代の透明な自我の深部に言語を見出した。ガリシオの仮説が中世的な世界観を足もとからゆすぶったのと同じ位に、自我の深部の言語の発見は近代の人間観を土台からやり倒したのだ。自分自身の内面の深部に私のものではない言語がひめられていたら？私だけのものではなくて他なる言語による、を占領されていたら？私のうちなる他者性を見出さざるをえなくなる。私に自分自身を把握することをはじめに可能にする言語による、私にはひとつの他つになる他はない。〈神様、私の中から私に返してください！〉〈A. マルトー〉言語の発見は自己の身体の見え方もある。こうして言語は、内面を経て人間を外面へと投げ出す。矢印は逆転する。〈内から外へ〉と。言語は人間の内面性の器官であると同時に外面性の、社会性の器官なのでもある。もはや人間は内面に安住しはしない。人間は、剥き出しの危険に満ちた他人たちの間へと投げ出されたのである。どしたら、私の内面とは、私とは何なのだろう？ここに真の問いかけがはじまる。人間の本性を言語を通して問うという事は、人間がいかにかに内面的であるかと、同時に根源的な偶然性であることへと問うことなのだ。それは、われわれ自身への、そして人間全体へのある不安に満ちた鋭い意識である。

山本 泰 (やまもと やすし)

以下の5つの小論の題目と執筆者は次のとおりである。

- |   |                  |                  |
|---|------------------|------------------|
| 1 | ことばと発語           | 灰庭久博 (はいにわ ひさひろ) |
| 2 | 〈いみ〉と「意味」        | 大塚仁子 (おおつか ひとこ)  |
| 3 | 言語。コミュニケーション。人間  | 権野信雄 (しの のぶお)    |
| 4 | 言語と神話            | 山根恵子 (やまね けいこ)   |
| 5 | Chomsky理論への解釈的批判 | 森友章夫 (もりとも あきお)  |

この研究会は関心をもつすべての人に開放されています。自由に御参加ください。

## < 1 > ことばと発語

言語と呼ばれているものの基礎にあって、「言語」と発語してみたときにそこから微妙にずれてしまうものがあるように思う。それをことばと呼んでみてもいいだろうか。それぞれのことばを発するときにはひらけるさまさまの思い・さまさまの世界・さまさまの時間、あるいはひるがえって、ことばがとどこおり、ことばにならないときのさまさまの思い・世界・時間、それをことばに表わしてつかみたい。

レミニイ・クワントは、ポール・リクールを用いて、人間の行為をゆびさす行為とつかむ行為とに分け、ゆびさす行為ははなす行為であり、つかむ行為を労働であるとす。はなす行為と労働との区別はいったん置くとしても、たとえばクワントの説明にはどこか違和感を感じてしまう。はなす行為がゆびさす行為であるという説明には、それが一種の比喩であるにしても、ことばを発するときの喜びと苦痛、ことばが発しないときのいらだちと苦痛、ことばがいけばひとり歩きするときの又工的動きや、ひとり歩きしはじめることばをひきもどそうとしながらそのことばを穿りつづけてしまう不快感・痛み、そういったものが抜けおちはじめている。言語として例に挙げられる、「あれは木です」「木があります」「木は、……」といったことばは、たしかにゆびさす行為という説明を受けいれやすいであろう。けれども、心の奥底を互に見つめ合った二人の人間がことばなく沈黙の時をおくるとき、あるいは、自分の内にうずまき思いを表現することばが見つかからないままくそして、そのことを意識することさえなく)人が立ちすくむとき、そこにあるいわば欠如態としてのことばとはいったい何であるのか? ゆびさす行為であるという説明によって何であるのか? さらにまた、ようやくことばを発したとき感じるつかんだという思いは、ゆびさす行為という説明・つかむ行為という説明はそれなりにわかる説明であるにしても、いったい何であるのか? 竹内敏晴の述べるように、「ことばとは、確定され、文字に書かれ、まぎれなく発音されるというものよりは、はるかに根源的な何かであるのではないか」と考えたい。例示されるものである言語を、いったん、発語されたものであることばの混沌とした広がりの中にもどして、そこからその広がりそのままつかみ直す作業が必要であると思う。

この作業は、ぼくにもいまだ不明である。いったん、仮設的な枠組を示すことにして、考えの太筋だけを示しておくことにする。

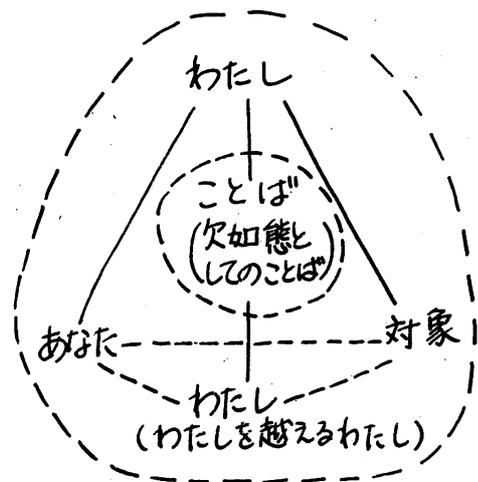
ことばを発するとき、あるいはことばが発しないとき、そこには、話すわたし、あるいは話さないわたしにとって、三つの軸が存在する。ひとつは、何を話そうとしているのか、話しているのか、話さないのかという対象への関係であり、二つめは、だれに対してあるいは何に回って話し、話さないのかというあなたへの関係であり、三つめは、(うまくことばにはならないが)話すわたし自身、あるいは対象やあなたと関わり合い・関わり合わないわたし、話すわたし以上のものであるわたし、わたしの全体とでもいうべきものとの関係である。それぞれ、対象への距離、あなたへの距離、わたしへの距離と言えどもいいだろう。話す行為、はなされ

たことは、あるいは欠如態としての話す行為、はなされたことは、大なり小なり、この三つの軸の交錯として存在し、非存在し、現れる。

話すこと、あるいは話さないことによつて、対象・あなたとの距離が存在するが、話すこととともに、この距離が結晶化する。言い換えば、この距離が結晶化するとともに、話す行為が生じる。このことは、二重の意味をもって、話さないことへ終項する。話さないことによつて、わたしは対象・あなたとの距離をもってはいるが、その距離を結晶化することはできない。距離の結晶化と話すことは、ともなうものだから。けれども、距離の

結晶化とは関係が距離化することであるから、対象・あなたとの直接的合一を求める場合には、はなすことを拒絶しなければならない。あなたと対象との比重があなたに傾くにつれて、あなたとの距離が鮮明に結晶化するようになり、対象との距離は不鮮明にしか結晶しなくなる。が、あなたへと傾いたことが、ことばによる距離化の境界を越え、あなたとの直接的合一を求めるときには、ことばは邪魔物ではない。ことばを越えたわたしは、わたしの身体、わたしの視線があなたとの融合を求める。おそらくここでエロティズムがほとばしり出るのだと思う。あなたと対象との比重が対象に傾くにつれて、同じようなことが生じる。対象への比重が高まるにつれ、わたしは、回つてはなすあなたを少しづつ失う。対象への比重が、ことばによる関係づけの枠をこえて高まる時、わたしはことばを失う。このことは、わたしの意識することなしに、驚きや悲しみ・怒りによつて生じることもあるが、対象との直接的合一を求めるがゆえに、ことばを拒絶するというかたちで生じることもあるだろう。ことばそれ自体は距離の結晶化であり、話すことは結晶化する距離を介した間接的な関係づけである。だから、ぼくたちが関係づけの衝動をもつときは、しばしば直接的な身体の動き、身体による接触をともない、それによる関係づけがことばによる関係づけを越えている。その意味では、つかむ行為に対比されるゆびさす行為としてはなす行為がある。けれども、ぼくたちがはなす行為にこめうるイメージが豊饒であればあるほど、はなす行為はわたしと対象・あなたとの間に結晶化する距離をぐんぐん近づけていくだろう。そして、もちうるイメージの豊かさを越えて関係づけの衝動が生じる時には、ことばによるはなす行為は捨てられ拒絶されて、直接的合一が求められることになる。仮にその多くが廢物であるとしても、ここでは、関係づけの行為はつかむ行為としてあり、その場合、つかむ行為は労働ではないのである。

話すわたしとわたしを越えるわたしとの距離について、あるいはそれ以外のさまざまなことについては不明である。これからの宿題にしたいと思う。



話す行為 (話さないこと)

## 〈いみ〉と「意味」

人間が意味を把持しているという事実を考えてみたい。「意味とは何か。意味を知るということはどういうことか。意味と言語、思考、意識、とはどのような関係にあるか。意味からの疎外、意味への疎外」という事実。これらの間はHelen Keller (1880~1968)の自叙伝に如実に描き出され、さらに問に対する答さえみいだされる。

周知の如くHelen Kellerは生後一年七月で病のために三つの感覚を失なう。そして満七歳の頃、サリバン先生によってはじめて、彼女の身体が「世界に結ばれる契機」と与えられる。それがあの「w-a-t-e-r」の出来事であった。w-a-t-e-r事件以前、~~と~~dollの結びつきはHelenにとって「指の遊び」であった。彼女は「言葉の存在を知らなかった。」つまりdollは意味のない記号でしかなかった。

しかしw-a-t-e-r事件は、〈ことば〉の影としての〈いみ〉の表出をHelenに可能とした瞬間であった。〈ところが突然私は、何かしら忘れていたものを出すような、あるいはよみがえってこようとする思想のおののきといった一種の神秘的自覚を感じました。この時初めて私はw-a-t-e-rはいま自分の片手の上を流れているふしぎな冷たい物の名であることを知りました。この生きた一言が、……私の魂を解放することになったのです。〉(Helen Keller; 岩崎武夫訳「わたしの生涯」角川文庫)

Helenは「物の名」よりもむしろ「物の名」とともに、その影である意味を獲得した。Helenが獲得した意味とは何であったのか。Merleau-Pontyは次のように説明している。〈語の意味は……その対象が或る人間的経験のなかでとる局面、……での私のおどろきのことなのだ。……言語はたしかに言語の意識を、意識の沈黙を前提としており、これが語る世界を包みこみ、ここからまずはじめに語が形状と意味とを受けとる。〉(Maurice Merleau-Ponty; 竹内茅郎・畑元宮本忠雄訳「知覚の現象学」II みすず書房 1996)

Helenの場合、〈いみ〉はいかにして「意味」となりえたか。いかにして、その可能性は現実として開かれたのか。Helenはw-a-t-e-r事件以前の自分の意識、あるいは感覚のあり方を次のように述べている。〈……私は暖かい日向に出かけるのだと知って、その考え(もしも言葉のない感覚を、考えと呼ぶことができるならば)に、私は喜んでおどろきあがったのでした。(op. cit., p.30) 私は自分の周囲に起こりつつあることは、たいがいわかってきました。……自分の物とひとの物とを区別することもできました。(op. cit., p.17) 私は自分が悪いことをしたときには、自分でわかったように思います。(op. cit., p.18) 〉

Merleau-Pontyは言う。〈黙せるコギト、私による私の体験、……このような主観性は……世界を構成せず、みずからつくり出したものではない領野として、己のまわりで世界を推察するだけだ。それは語を構成せず、まるで嬉しいひとが歌でも唱い出すように語るだけだ。それは語の意味を構成せず、それにとって語の意味は、それと世界ならびに世界のなかに住みついた他の人びとの交渉のなかで湧出するだけだ。(op. cit., p.296) 〉 Helenにとって熱は光の存在を意味した。〈いみ〉はHelenの内では感じ、成熟し、生き、歌を唱っていた。〈いみ〉は他の人々との関係のなかで成長する。Merleau-Pontyは次のように説明する。

〈もしも私があらゆる言葉に先立って私自身の生活および思惟と接触しているの

でなかったならば、もしも私のなかで語られたコギトが或る黙せるコギトと出会うことがなかったならば、私はそれらの言葉にどんな意味も、派生的で非原本的な意味さえも見い出さないであろう。(op. cit., p. 294)》 黙せるコギトと語られたコギトの出会いが原初的<いみ>から「意味」を生み出す。ある自閉症児ラウンが最初に口にした言葉は ウォ(water)であった。その「ウォ」の発声を可能にした力は家族の語りかけであった。母親の原初的な語りかけは、ラウンにとって「あらゆる言葉に先立って、ラウン自身の生活および思惟との接触」だった。自閉症児ラウンは、母親が触れることも許さず、同室にいる母を一瞥さえしない「自己充足と自給の世界」とじこもっている。《ついに彼は視線を落とす。彼は目の前の空間を虚ろに見つめた。それから身体を揺すりはじめた。等間隔で前後に揺する。今度はハミングをはじめた。二つのメロディをさまざまな調子で、寸分違わぬ時間ずつ交互に歌うのだ。スージー(彼の母親)は彼と行動を共にした。》(Barry Neil Kaufman, 南口英男訳「明日へ歩む詩」三笠書房 p. 92) <いみ>は「意味」が身体性の水準に根づいているその根なのである。<いみ>は身体性の水準に宿っている。ラウンは、その根に触れ、語りかけつづけた家族との関係のなかで出会いをくりかえしていった。そしてラウンにとって<いみ>が「意味」へと開かれていく。《スージーは…再び彼の隣に坐った。肩に手をかけ、腕をゆすった。彼はまた警戒しながら、それを許した。そして再びくつろいだ。彼は身体を揺すりはじめ、スージーも自分の身体を揺すった。(op. cit., p. 94)》 彼らとラウンとの交流は、場を共有し、身体と身体を直接に触れあい、身体を同じリズムで揺することからはじまり、ラウンは人間の「世界」のリズムをみごとに身につけていく。

w-a-t-e-r事件によってHelenは「意味」を獲得した。「意味」の獲得がHelenに与えたものは何であったか。《しかも一つ一つの名はそれぞれ新しい思想を生んでくれるのでした。…私の手に触れるあらゆる物が、生命をもって躍動しているように感じはじめました。…私は生まれて初めて、後悔と悲哀とに胸を刺されました。(op. cit., p. 31)》 「意味」は確かにHelenに新しい「世界」を与えていった。《今まで経験によって私の頭に刻みつけられていた印象が、新しい言葉によってよみがえることもありました。(op. cit., p. )》 Merleau-Pontyは言う。《意識は言語の所産ではない。…語も、語の意味も、意識によって構成される。…語は、…世界内存在としての私の身体の或る転調のことだ。(op. cit., p. 295)》 Helenは一般的幼児と同様に、身体性世界から言語性世界へ織り込まれていく。あるいはHelenは一般的幼児と同様に、<いみ>の表出の代償として、彼女の意識を言語=「意味」という鑄型で分節化していく。従って語の側面からゆえば、語はHelenの身体が感じ、Helenの身体が生きていた<いみ>の世界を「意味」の世界に転調する。

以上はHelen Kellerの経験をもとに、原初的<いみ>の周辺を明らかにしようとした。

《言葉は生きた一つの全体なのです。》(森有正「遙か百年ノートルダム」筑摩書房 p. 146) 《個々の単語はまだ決まっていなくても、心の中に、文章が、あるい

は語句の全体がまず総合的に映し出され、個々の単語は、その全体がすでに刻み出されている形態あるいは空間の内容を埋めるような具合に、そこにとび込んで来るのです。(Op. cit., p. 146) 本当は、ほとんど肉体的に一つになっているとむいえる言葉があって、それから意識が生れ、だんだん明確になってくるのが正しいのに、そしてそこからもう一度、今度は意識的に学び、完成していく、というのが唯一の道なのに、それとは逆の不自然な道を辿らざるをえない、……。 (Op. cit., p. 150) >> 森有正の語に関するこの感覚は、Helenやラウンに通じるものを持つ。人間は Helen よりもっと幼い時期に Helen と同じ経験をしている。そして Helen が獲得していく「意味」、幼児が獲得していく「意味」は、意味構造を持ち、社会的存在物、客観物として人間に屹立してくる。この屹立した物を対象とする学問が言語学であり、特に意味を対象とする学問が意味論である。

しかし、「意味の問題」は、「意味の根であるくいみ」、つまり身体性のバルから始める。そして「くいみ」から「意味へ転調する過程を對象化することなくして、言い換えれば、w-a-t-e-r 事件以前の Helen が経験していたくいみ」が、w-a-t-e-r 事件以後 Helen に同一化されていく「意味」、つまり構造を持ち、客観物としての間主観的「意味」、へといかに生成されていくかという意味構造の存立の機制(廣松渉「世界の共同主観的存在構造」)を解明することなくして、「意味」の考察はどうどうめぐりをはてしなくくりかえすしかない。さらに、「意味」が宿る「世界」に内在する「意味からの疎外」「意味への疎外」(真木悠介「現代社会の存立構造」)という問題性を自らの場としないかぎり、「意味」の問題は、形而上学になるか、あるいは「意味」を考察する理由さえも見失うことになる。

意味のありオ(機能ではない)を身体から遊離してしまう時、<身体>の凝固、<意識>の凝固、そして<社会性>の凝固を、我々は目の前にするにちがいない。今、我々は Helen のナイーブな経験と、Merleau-Ponty の鋭い考察の中に、「くいみ」が身体性の水準にあることを知る。

そして「話行為は心と身体のものである」(矢野武真「吃音の本質」弘立社 p. 80) ならば、野口体操は、生きた一人一人の人間、しかも意味から疎外されたり、「意味へと疎外されたりしている人々に、原初的くいみ」の再獲得の道を拓けてくれるかもしれない。もちろん私は野生への、原初への回帰を主張しているのではなく、失ってしまった「意味の影」-くいみ-に注目したいのである。

野口体操のハツのテーゼから三つ抜萃すると、◎からだの実感にうったえることにより、ことばの意味を飛躍的に変革するいとなみを体操という。◎今はまだことばにならない感覚能力をみつけたし、それを育てあげ、それを中身とする新しいことばを創ることも体操である。◎すべてのことば(抽象語も含む)は、その発生をたどると必ずからだの直接体験にたどりつく。この直接体験の実感を探り出すことにより、そのことばの意味を変革するいとなみを体操という。(野口三三三「からだからの出発 思想の科学」) 母親はラウンの体を揺する。確かにラウンが獲得していく「世界」と野口体操が指向する<世界>は対立的ではある。しかしともに影の逆説の論理を知っている。(河合雄一の現象学)「意味」(謀=意識)の影-くいみ(ことば)-の再獲得こそ、意味構造を照らし出す光源となるだろう。

「ヒトがヒトにと、て問題となり、ヒトがほかなるぬおのれ自身を反省するにいたるのは、ヒトとしての存立、ヒトとしての働きが、スムーズに営まれているときではない。…危機や異変、すなわちコトに面して、はじめてヒトは、ヒトというモノがなんであるのか、反省する。」く茅野良男『哲学的人間学とはなにか』『現代のエスプリ』82人間学とは何か』1974)そして、「すべて人間の研究と云うものは自己を研究するのである。天地と云い山川と云い日月と云い星辰と云うも皆自己の異名に過ぎぬ。自己を措いて他に研究すべき事項は誰人にも見出し得ぬ訳だ。もし人間が自己以外に飛び出す事が出来たら、飛び出す途端に自己はなくなって仕舞う。しかも自己の研究は自己以外に誰もしてくれる者はない。いくら仕てやりたくても、貰いたくても、出来ない相談である。」く夏目漱石『吾輩は猫である』1906)このように、人間の研究=自己の研究と捉えてみることができるであろう。では、自己=自我とは、何なのであるのか。又、どのように発生するのであるだろうか。G・H・ミードによれば、「自我は、発達していくものである。自我は、[人間が誕生したとたんにすでにあるものではなく、社会的経験や活動の過程で生じるもの、すなわちその過程の全体およびその過程にふくまれている他の個人たちとの関係形成の結果としてある個人のなかで発達するものである。』く『精神・自我・社会』1934)さらに、「個人は他人とのコミュニケーションをうけてのみ、つまり有意味のコミュニケーションによる社会過程の精密化をうけてのみかれの自我に到達するものである…。」く『M・S・S』)このように、ミードにとって、自我の発生母体は、コミュニケーションなのである。つまり、コミュニケーション(社会過程)=自我(人間)なのである。

さて、コミュニケーションという言葉をもっと広義に使っているのは、C・V・グレイストロースであろう。彼によれば、「社会あるいは文化を言語に還元することなしに、社会を全体としてコミュニケーションの理論によって解釈する「コバルニクスの革命」(この表現はオドーリクール、グラネ両氏のものである)を起すことは可能なのだ。今日でもすでに、この試みはミョのレヴェルにおいて可能である。なぜなら、親族関係と婚姻の規則は、集団相互間での女性のコミュニケーションを保証しており、それは、経済上の規則が財貨や労力のコミュニケーションを、言語の規則が意思のコミュニケーションを、保証するのと同じだからだ。コミュニケーションのこのミョの形態は、同時に交換の形態でもあり、これらの交換形態のあいだには、明らかに何らかの関係がある。」く「第三章、第四章への後記」『構造人類学』1958)又、「すべての社会で、コミュニケーションは、少なくともミョの水準で展開される。すなわち、女性のコミュニケーション、財貨や労力のコミュニケーション、メッセージのコミュニケーションである。したがって、親族体系の研究と、経済体系の研究と、言語体系の研究とは、ある種の類似を示すことになる。これらの研究はミョとも、同じ方法によっている。ミョの研究は、共通の世界の中で、各々の研究が自分を位置づける戦術的水準に応じて異なっているだけである。これらつ

け加えてさらに、親族と婚姻の規則は、第四の型のコミュニケーション、つまり表現型のあいだでの遺伝子のコミュニケーションの型を規定するということもできるかもしれない。それゆえ文化は、言語のように、それ自身の属性からして、文化に属しているコミュニケーションの形だけから成りたっているのではなく、同時にまた——そしておそらくは、とりわけ——自然の領域でも文化の領域でも展開される、あらゆる種類の「コミュニケーションのゲーム」に適応可能な「規則」から成りたっているといえるのである。『民族学における構造の観念』、『AS』このように、レヴィ=ストロースは、社会・文化体系=コミュニケーション体系と捉えたのである。

さて、レヴィ=ストロースに従って、「社会人類学と経済科学と言語学がいつか連合して、コミュニケーションの科学という共通の領域を創設することを期待してよいとしたら、」(ibid.)としても、当のレヴィ=ストロースが、コミュニケーションの科学そのものの建設にそれほど取り組んでいっているわけではないので、われわれとしては、まずは、言語の問題から、コミュニケーションの科学へと入っていくのが、順当であると思われる。それで、(言語の)コミュニケーションの科学として、(社会心理学において)既存のものがないわけではない。シャノン・ウィーヴァー・シュラム・オスグッドらのコミュニケーションモデルである。だが、彼らのモデルは、電話での通話を基にしたものであり、これは、ミードの二囚人のコミュニケーションに相当するであろう。「言語あるいは言葉の過程—その発生と発達—の研究は、社会心理学の一部門である。というのは、言語過程は、相互に影響を及ぼしあっている生物体からなる集団の内部でいとなまれる行動の社会的過程との関連においてだけ、理解されるものだからだ。また、それは、そのような集団の諸活動のひとつにほかならないからである。ところが、言語学者は、しばしば、独房にいる囚人のことを考えてきた。囚人は、他の囚人が自分とあなじ立場にあることを知っており、それとコミュニケーションをもちたくなる。そこでかれは、なにがのコミュニケーションの方法を工夫する。それは、なにが任意の思いつきであり、壁をと人と人とたたかといったものである。さて、この見解では、われわれのだけれども、自分自身の意識の独房にとじこめられているのであり、そのうえで、他の人がとも同様な立場にあることを知って、かれらとコミュニケーションをはじめする方法を生み出していくということになる。」(『M.S.S.』)それで、われわれとしては、avoirとしてのコミュニケーション=伝達だけではなく、êtreとしてのコミュニケーション=交わりをも、視野に入れたところのコミュニケーションの科学を自差してゆきたいと思うのである。

最後に、われわれは、一般意味論のようなコミュニケーション信仰のオプティミストではありえない。(蛇足)だが、現代は、「情報化社会」のディスプレイコミュニケーションの時代である。だからこそ、言語が問題になるのである。「『科学』と『機械』、その両性体である『商品』が今現今の人間をその存在性より隔離している。その夢魘より脱せんとするうめき声が、言語形態の中に凝滞しているかのようなのである。」(中井正一『中井正一全集3』1965)からなのである。

1977・1・9<日>(社会心理学徒)

#### 4 言語と神話

言語と神話の関係において両者について述べる理由は、人間文化を生み出す力に迫る上で、両者は相補的であると思うからである。言語の科学は近年めざましい進展をみせ、言語学で試みられた分析方法が、レヴィ=ストロースによつて手がけられた神話の構造分析などに適用されている。しかし、real world knowledge だけから生まれたと思われる神話、原初的觀念を生み出す衝動をエネルギーとして形成された神話を、linguistic knowledge の分析から考え出された方法で、どれだけとらえることができるであろうか。(ここでいう神話は、現代の神話ではなく神が生まれたころの太古の神話を指している) 言語学の編み出す格子だけでは、おおい切れないものを神話はもっているに違いない。そうかといって、神話だけを対象にした独自の考察も考えつかない現在、言語学の格子からこぼれおちていると思われる神話の部分を拾い集めることから始めたい。

概念という term について考えるとき、言語学では、今のところ classify できる概念しか扱って切れていない。言語能力—つまり与えられた言語を知っていれば、そのことによつて説明される能力—を、規則や構造を用いて説明することによつて、チョムスキーが言うところの人間精神の普遍的生得構造が確かめられるなら、そのことによつて精神の生成する概念が全て説明しつくせることにならなければならない。しかし、言語現象を対象として考えてみても、秩序に居心地悪さを感じるノンセンスなどは、今ある規則や構造のすき間をぬって絶え間なく生み出されていく。それらを規則や構造をもつてしてどこまで追いかけることができるだろうか。変形操作の普遍性を、その体系内どこまで説明しつくせるだろうか。変形文法を必要とすることばの部分には、以外に広大で奥深い体系が存在しているかもしれない。また、言語現象の一瞬手前ともいふべき神話的衝動についてのウゼナーによる次のような興味ある指摘があげられる。「絶対的な無媒介性において、個別的现象がもっとも基礎的なクラス概念の介入すらなく神格化される。目のまえに見えるその一つのもの、それ以外の何ものでもなく、まさにそれが神なのだ。」<sup>111</sup> 神という概念が生まれるこの衝動をも、精神の普遍的な機能は説明できなければならないはずだ。カッシーラーは次のように言っている。「言語の根元的な概念作用の秘密をわれわれに開いてくれるかもしれない鍵を探さなければならないのは、こうした神話のもつ直観的創造形式においてであつて、推論的理論的概念の構成過程においてではない。」<sup>112</sup> このような根元的な概念作用の秘密をも、チョムスキーらの展開する言語学だけで解き明かすことができるだろうか。カッシーラーは、神話や言語の関わる精神の根元的な概念作用を、実在そのものにぶつかったときのイメージを出発点にして考え、象徴的神話論を示したが、根元的なものの様相を明らかにしただけで、動態的な理論へと発展させなかった。一方、レヴィ=ストロースは神話理論を動態的に展開させているが、彼のシンボルの扱いは、二項対立的な関係のシンボルであり、カッシーラーの指摘した神話的、原初的イメージは、自然対人間

の関係の中で片付けられてしまっているように思われる。このようにみえてくると、ウゼナーの示した「瞬間神」を生み出す精神にこそ、神話の根元的な生命があるように思えるのに、そのしくみの解明と体系化は成されていない。それが成就されれば、ある意味で太古の神話の死を告げることにもなるかもしれないけれど、精神のこの部分を逃しては、人間の文化は考えられないし、また何のための人間理解かもわからなくなってしまうだろう。神話には、以上のように、classify できない状況を、言語よりも原初的に、そして豊富にもっているといえよう。

つぎに、ことばがすでに在る世界だけに視点をしばって、言語と神話の関係を考えてみたい。ことばがある世界においては、神話はさまざまに変形し、再生産されていく。この世界にあっては、ことばは創造性をもつが、神話そのものには、生産性しかないように思われる。従って、神話を生かすのはことばだともいえる。そして、ことばを介する故に、言語と神話の重なる部分は大きくなる。R. バルトに従って言うならば、神話はことばによって語られ、言語に対して外延的な二次的な意味論的体系をもつということになる。また、鋭い知的直観と論理的思考を駆使して、言語を媒介とした方法論を武器に、チョムスキーは言語に人間精神の普遍的構造を、レヴィ=ストロースは神話に人間精神のつくり出すものの普遍的構造を探究して活躍している。確かに、言語に関しては、閉じた体系の中で精緻さを極めた研究が展開されるべきであるが、それと同時に、その限界も明らかにされなければならない。そこで立てられた理論は、精神作用に関わる全ての分野に拡大解釈されてはならないと思う。神話についていえば、共時面で要素をどんなに原子化していても、通時構造を考えに入れないでは、その全体像はとらえられない。このことから、世界と人間に興味を覚える限り共時レベルだけの思考だけでは決して満足できない我々の指向性を満たしてくれるものとして、言語を補う形での神話を対置できるだろう。また言語についても、十分に展開されていない負の實在の側面とごもいふべきものが、今ある言語学を補う形で、これから研究されていく可能性もあるに違いない。何となれば、より広い人間理解をめざして未来へ志すのは、第3の軸に向かって必ずや時が流れこみ、変形が永遠にかけられていくはずであるから。

文化を生成していく営みが続く限り、ことばの研究は精神を研究していく上でますます重要な鍵となるに違いない。以上述べたように、言語学の対象とすることばだけではなく、神話のことばをも含めて、より強力な理論だけでなく、より強力な認識力を、これからは生み出していかねばならないだろう。この小論においては、具体的に神話を操作しないで、神話への一方的な思い入れを支えに、言語と神話を対比させてしまった懐みがある。不備な点、厳しく御批判頂きたい。

(1) エルンスト・カッシーラー、岡三郎・岡富美子共訳、『言語と神話』、  
P. 58

(2) 同書、P. 59

## Chomsky理論への解釈的批判

社会学徒である我々が言語学の固有領域へ入りこんで感じる苛立ちの原因は、社会学と言語学の学的対象の差異によるのか。社会現象の言語的性格を看過してきた既存の社会学への契和から出発せんとする者侯は、人間科学のうち極めて精緻化された言語学の方法論を採り、〈社会〉の科学的分析の範例とするしかるのか。さらに、言語を社会現象の一形態として解明することに、言語学は力あるのか。こういつた問いかけの確さと分別の確さを唯一の取柄としてゐる者にとつて、答えは「然り、或るいは否」である。言語学が固有の言語像に制約された意味で「然り」、或るいは、他方、我々デスペラードの意欲論的前提に賭けて「否」なのだ。この基線から出発せぬ限り、言語学へ出向いて、不帰の人となつたり、身ごりみ利がいてまかねない。我々は、心的対象である言語を科学する際、対象が観兵を規定するのではなくて、観兵が対象を規定する、と叙べてゐるF・D・Saussureの教之に従つて、社会学での言語像を割りあげた課題を負ふべからざるまい。以下は、その課題へ向け投ずる最初の捨石の考察である。

現在、言語学で有力な理論学派を形成してゐるNoam Chomskyの言語理論は、〈生成文法(generative grammar)〉を概念的な核としてゐる。その根拠としてChomskyは、Humboldtの「有限の手段を用いて無限の文を生成する」という言語像を指し示してゐる。これに適う着想は、記号列としての文(語の連鎖)に、回帰的構造を想定することである。こうすれば、ある有限の規則の集合(=文法)が、語彙目録を入力情報として回帰的に(recursive)限定しながら、無限の文の集合を生成することが可能となる。Chomskyのこの観点は当然、文法の構成に、表層構造・深層構造・変形規則、之々に変形規則を制約する普通文法を要請する。この言語理論に固有の課題は、包括性・精密性・簡潔性・検証可能性といった経験科学の方法論的原則に沿つて、発話資料に照して native speaker-hearerの言語直観に適合的な文すべ之を、そして、それだけ生成し、決つて、逸脱的文を生成する諸規則の体系を構築することにある。(「評価の半頃」の理論段階に自己限定して方法的客観性をもつChomsky理論の自己批判はる度である。こうした性格の言語学に内在的課題は割愛したい。)

我々は上記の方法論を考慮しつつ、Chomsky理論の人間学的解釈の側面を考察しよう。Chomskyの言語Modelは、言語直観によつて適格/不適格を模証された文の生成文法である故に、言語直観のモデルであり、有限の手段で無限の文を創造する能力=言語能力(linguistic competence)のModelである。たしかに、Saussureの「言語(langue)」では眺めえないう文形成という「言語活動」のメカニズムを拓いてゐる。さらに、Chomskyは進んで、言語能力のうち、変形規則を制約する普通文法を、人間に生得的な構造であると仮定する。なるほど、Chomskyのように、コミュニケーションの媒質としての言語に関する生得的構造を先験的に仮設すれば、文創造のテクニックの抽象の最高次の産物、普通文法は、これに帰属させねばならなくなる。又、同じテクニックの抽象物たる個別文法は、後天的に習得される、という形で人間に関係づけ

らぬわけならぬだろう。かく、正常な言語直観を不可大人は、「言語能力」を  
保蔵し、その厳しい制約のもとで自由に、「言語運用」していることとなる。生成  
文法理論と、その人間学的解釈は正確に相環している。しかし、生成文法が意味論  
を含めて分岐し、その趣程を例えれば、J. Emonds の「構建保持の仮説」のように変  
形のメカニズムに内在的に関わるよりむしろ、変形を構想可能な technical な外的  
制約条件が構築され、それが「普通文法」と同じ位相にあることを考慮すれば、生  
成文法理論が未だ試行過程にあることを差っ引いても、Chomsky 理論は、文の形成  
を instrumental な対象性として外的実在化させ、その操作的構造を「有限な手段」のメ  
カニズムとして technical に構成しているにすぎないと考えられるのだ。はたして、  
「言語能力」は人間の内部装置か、と問わざるを得ない。

たしかに、「語」を操作する主体として人間という立場では、Chomsky の変形生  
成文法は、Saussure の「langue」を「lexicon」としてくり入れ、「parole」という実践的  
活動までも含みこんで展開されているに見える。人間の「言語世界」が「文の形成  
」という意味伝達の現場に還元されているからだ。しかし、Chomsky 理論で「無限の  
文を生成可能な」「有限な手段」であつた、人間ではない。Chomsky 理論が解剖して  
いるのはむしろ、人間が、他者とコミュニケーションする手段としての記号列である文  
を形成する際に不可避免的に与えざるを得ない対象的特性のように思える。人間の  
acceptability による制約下での「語」を媒体としたコミュニケーション形式の経済性  
といつて可い。生成文法は、「語」と、それを操作する人間との相互規定に必然  
的に規定される「文の生成」のメカニズムの分析であつた、人間の生得的言語能力  
の査証ではない、と考える。Chomsky は、人間が獲得した「語」を意味伝達を可能に  
らしめるように記号列に配列する technique を分析しているのだ。それは、自  
己・他者・事物の「認識」を記号列化する technique とは存りつても、決して、「認  
識」を分析することには存しない。まして、人間の産出した言語的世界（表象の  
実在的世界）、コミュニケーションの諸形態の分析とは切れていると云う他ない。生成  
文法は人間の精神（認知能力・認識能力 competence）といった人間の内的(?)本質を解明  
しつつあるという看板は、三浦つとむの批判するように、サイバネティックな意匠（  
S-R 図式の批判的継承）で描かれていよう。存るほど、Chomsky が、認識と言語規  
範（意味）を理論的仮説としての深層構造に還元して理論内に採り込み、表現（表  
層構造）を生成させるのは、アメリカ構造言語学にとって革命的で、普通文法は、  
人間の認識（能力）の奥儀を開示しているかに映るかもしれない。けれど、Chomsky  
が、生成文法総体と言語の知識（言語能力）として人間に内属させるとき、現実と  
の生きた交流を遮断してモノローグができる怪物は存んではあるか。対象-認識-表現  
という言語の過程的構造という人間の対象的言語活動（認識）、そして、ダイア  
ログの構造は、依然として分析されるのだ。

Chomsky の変形生成文法の痕跡の巨大な軌跡は、海の戯れなのか、という感慨と共に、  
我々は撒収を余儀なくされる。しかし、撒収の度毎に、我々は自らの揺籃を深  
めねばなるまい。そのためにも、言語学の飛起する諸問題を追及する作業は継続さ  
れるだろう。